

## 一般共同研究 I.

### 1. テーマ

三遠南信と周辺地域の空間経済分析に関する研究

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 渋澤博幸（豊橋技術科学大学）

共同研究者 宮田譲（豊橋技術科学大学）

打田委千弘（愛知大学）

### 3. 期間

2016 年 6 月から 2017 年 3 月まで

### 4. 目的

本研究では、三遠南信地域を対象として、地域間産業連関表を作成する。同表を用いて、三遠南信地域の産業構造および取引関係を明らかにする。地域間産業連関モデルを構築し、シミュレーション分析を行う。また、地域間産業連関表の推計および分析方法に関するマニュアルを整備し、越境地域政策を支援する情報を蓄積する。

### 5. 実績概要

中部圏地域間産業連関表を用いて愛知・静岡・長野県の市町村間産業連関表を試算した。都道府県の多地域表から市町村間の多地域表を推計するための方法を開発し、その推計方法の論文を作成した。

市町村間産業連関（多地域表と地域間表）モデルを分析するためのシステムを開発した。システムは Matlab と Excel を用いて開発した。

市町村産業連関表を用いて、各乗数の効果の計測を行い、三遠南信とその周辺地域の産業構造や地域間交易関係の特徴を明らかにした。仮想抽出法を用いて、三遠南信地域の各市町村の経済の重要性等の経済効果の計測を行った。推計方法に関する解説を作成した。

### 6. 今後の展開

三遠南信産業連関表を用いた各市町村への経済効果の分析を進めるとともに、応用一般均衡分析への適用や、簡便なツールの開発等を検討していきたい。

## 7. 研究内容

1) 三遠南信と周辺市町村を対象とした市町村間産業連関表の推計とマニュアルの作成

中部圏地域間産業連関表を用いて愛知・静岡・長野県の市町村間産業連関表を推計するとともに、簡便な推計方法のマニュアルを作成する。

2) 市町村間産業連関モデルの構築

市町村間産業連関モデルを分析するためのシステムを開発する。システムは Matlab と Excel を用いて開発する。

3) 市町村間産業連関モデルによる分析

生産誘発係数、交易係数変化の影響、前方連関効果、後方連関効果等の計測を行い、三遠南信とその周辺地域の産業構造や地域間交易関係の特徴を明らかにする。

4) GIS データと連携した経済効果の計測手法の開発

仮想抽出法を用いて、三遠南信地域の町丁大字レベルの経済効果の計測を行う。町丁大字単位のデータを用いて、選択したエリアの生産活動が三遠南信と周辺市町村へもたらす影響を明らかにする。

## 8. その他実績

1) 高橋楓蔭・渋澤博幸・宮田譲・打田委千弘，三遠南信と周辺地域を対象とした地域経済効果の評価に関する研究，日本環境共生学会第 19 回（2016 年度）学術大会学術論文集，立正大学，pp. 56-62，2016. 9. 18

2) 高橋楓蔭・渋澤博幸・宮田譲・打田委千弘，越境地域を対象とした空間経済(2)効果の計測に関する研究，日本地域学会第 53 回(2016 年)年次大会，新潟大学，pp. 1-6，2016. 10. 10

3) 渋澤博幸・宮田譲・打田委千弘，三遠南信と周辺地域の空間経済分析に関する研究，越境地域政策研究フォーラム(愛知大学三遠南信地域連携研究センター)，愛知大学，2017 年 1 月 28 日

4) Shibusawa, H., Miyata, Y. and Sakurai, K., Evaluating Spatial Economic Impacts in Cross-border Regions in Japan: A Regional Input Output Model Approach, the 63rd Annual North American Meetings of the RSAI, Minneapolis, USA, pp. 1-16, 11 November 2016

5) Shibusawa, H., Miyata, Y. and Sakurai, K., Natural Disasters and Regional Sustainability from the Global Level to the

San-En-Nanshin Region, the 21st National Congress of the Mexican Association of Science for Regional Development, Merida, Mexico, 15 November 2016(招待講演)

## 一般共同研究Ⅱ.

### 1. テーマ

広域地方圏と大都市圏を結合するゲートウェイ・シティとしての豊橋市の地域特性に関する地理学的研究

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 阿部亮吾（愛知教育大学）

共同研究者 久保倫子（岐阜大学）

林 琢也（岐阜大学）

田中健作（豊田工業高等専門学校）

協力者 近藤暁夫

### 3. 期間

2016 年 6 月から 2017 年 3 月まで

### 4. 目的

愛知県豊橋市は、人口減少時代で空間的に縮小しつつある名古屋圏にあって、三遠南信地域にも接続できる中核都市であり、その重要性は今後ますます増していくと考えられる。そこで本研究は、広域地方圏と大都市圏をつなぐゲートウェイ・シティとしての豊橋市の越境的な都市機能を明らかにする。

### 5. 実績概要

【全員】2016/9/4 にメンバー全員で豊橋市内を巡検し対象地域の概観を把握した。【阿部】豊橋市役所と愛知大学で外国人留学生の進路に関するデータ収集と支援の在り方を聞き取り調査した。【久保】豊橋市中心市街地に 2000 年代以降に建設されたマンションについて、管理会社やディベロッパーに聞き取り調査を行い、管理組合理事や居住者 10 名への聞き取り調査を実施した。また、住民へのアンケート調査を実施した。【林】豊橋市の産直施設「めぐりパーク食彩村」への聞き取り調査を行い、参加農家の詳細や販売実績等のデータを入手した。また、平日・休日の集客圏に関する調査も併せて実施した。【田中】豊橋駅のゲートウェイ機能を把握するため、時刻表（1986 年、2000 年、2010 年頃）および大都市交通センサスを用い、豊橋駅（および岐阜駅）における優等列車の発着本数、主要駅間の運行本数、駅間の旅客流動状況を集計して分析した。【近藤】過去 40 年間に及ぶ消費者行動調査データを整理し、

豊橋市の商業中心性が 1990 年代から急速に低下したことを確認した。また、商業統計メッシュデータから、豊橋市の商業空間構造を明らかにした。

## 6. 今後の展開

今後は、各メンバーが残された調査項目を実行するとともに、名古屋圏（大都市圏）と三遠南信地域（広域地方圏）の両者を接続するゲートウェイ・シティとして豊橋市が果たし得る役割と、その可能性を活かすような「越境地域政策」の提言を行いたい。具体的には、市内中心市街地の新規建設マンションに住み替える居住者や高等教育機関における外国人留学生等の人口流動の空間的特徴、豊橋駅を中心とした都市間結合の様相、中心商業地や農産物産直施設が惹起する消費者の購買空間の特性等が明らかにされる。

## 7. 研究内容

### 1) 研究計画

上記の研究目的を達成するために、名古屋圏と三遠南信地域のゲートウェイ・シティである豊橋市を対象に、以下の 3 つの観点で調査を実施した（()内は各調査の担当者、★は研究代表者）。

#### ①居住環境

- ・都心回帰現象と居住環境の変化に関する調査（久保）
- ・公共交通体系と地域間結合の再編に関する調査（田中）

#### ②都市住民の生活行動

- ・消費環境の変化と郊外大型店に関する調査（近藤）
- ・都市近郊農業の変容と観光レクリエーションに関する調査（林）

#### ③社会・経済構造

- ・教育環境の再編と人材流動に関する調査（★阿部）

### 2) 研究方法

現地調査、居住者へのアンケート調査、各自治体・機関等への聞き取り調査、デジタル・データ（ならびに統計資料）の入手と GIS による空間分析、等を組み合わせて実施した。

### 3) 調査スケジュール

調査スケジュールとしては、6 月～7 月にかけて研究の打ち合わせと豊橋市での現地調査を実施した。それをふまえ、8 月～11 月にはアンケート調査や聞き取り調査などに取り掛かった。10 月中旬には

進捗を名古屋地理学会で報告した。これらの調査結果にもとづき、調査テーマ間の相互関係を複数回の研究打ち合わせ会にて議論しながら、豊橋市の有するゲートウェイ・シティとしての都市機能を分析した。本研究の成果を通じ、また先行の岐阜市における研究成果とも比較しつつ、三遠南信地域（広域地方圏）と名古屋圏（大都市圏）とを双方向に結合する都市として、人口減少時代に豊橋市が果たし得る役割とその可能性を活かすような「越境地域政策」の提言を検討した。

## 8. その他実績

### ◆ 学会発表

【阿部・久保・林・田中・近藤（+駒木伸比古）】名古屋地理学会「秋のシンポジウム：人口減少時代の名古屋大都市圏を考える」（2016 年 10 月 8 日、於：愛知大学）にて本共同研究の成果も交えて報告を行った。

【阿部・久保・林・田中・近藤】2016 年度越境地域政策研究フォーラム（2017 年 1 月 28 日、於：愛知大学）にて本共同研究の成果報告を行った。

【久保・駒木伸比古・田中】①地理空間学会大会（2016 年 6 月 18 日、於：筑波大学筑波キャンパス）にて「岐阜市郊外住宅地における高齢化・空き家化の進展と居住環境の実態」を発表した。②IGU Urban commission meeting Shanghai（2016 年 8 月 19 日）にて The decline in residential environment in Aging Japanese suburbs.. を発表した。

【林】経済地理学会中部支部 4 月例会（2016 年 4 月 23 日、於：岐阜市うかいミュージアム）にて「都市近郊農村とブドウ産地の狭間でー岐阜市長良地区にみる都市農業とアグリ・ツーリズムの諸相」を発表した。

## 9. その他 特記事項

最終的な成果報告書として、阿部亮吾・久保倫子・田中健作・近藤暁夫・林 琢也・駒木伸比古（2017）『広域地方圏と大都市圏を結合するゲートウェイ・シティとしての豊橋市の地域特性に関する地理学的研究』を作成した。

## 一般共同研究Ⅲ.

### 1. テーマ

半島文化の内発型展開と越境ネットワーク化に関する研究

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 嶋津隆文（特定非営利活動法人フォーラム自治研究）

共同研究者 飯笹佐代子（青山学院大学）

檜 槇 貢（長崎国際大学）

古賀 学（松蔭大学）

吉井 信雄（名古屋市立大学）

協力者 久保田経三、島海賢三、三島康雄

### 3. 期間

2016年6月から2017年3月まで

### 4. 目的

本件は半島エリアにおける住民主体の内発型の文化活動に着眼し、新たな地域活性化の取組みを検証する。併せてその取組みの越境ネットワーク交流や、大学による遠隔地連携サポートのしくみづくりを考察する。

### 5. 実績概要

東松浦半島・北松浦半島での調査先として、11月に佐世保市役所、伊万里市役所などを訪問。先行例の調査先としては「まつうら党交流公社」（「ほんなもん体験」民泊組織）と「肥前窯業園協議会（日本遺産としての発信）」を取り挙げた。あわせて長崎国際大でワークショップを開催した。

渥美半島の調査先として、10月に田原市役所、愛知大を訪問。先行例としては「渥美どろんこ村」（ファームスティ）と「渥美半島の風」社中（地域文化情報誌刊行）を取り挙げた。同時にどろんこ村でワークショップを開催した。

### 6. 今後の展開

今後は半島文化の振興と越境的な大学連携の可能性を検討する。各地に胎動する半島文化の新たな活動に対し、地元大学はその活動をサポートする機能を果たせるかを考察する。とくに地元大学の「内的サポート」としての地域振興や半島振興への情報、

提供機能の可能性に着眼する。一方で「外的サポート」としての、半島文化の活動を全国へ発信する連携機能のあり方を考察する。すなわち半島文化のデータベース化とネットワーク化を図る、越境的なしくみづくりについて調査研究していく。

### 7. 研究内容

本調査研究は、半島振興法の課題を踏まえ、半島における文化振興と活性化の可能性を検討することにある。

半島文化の発信として、渥美半島でも松浦半島で様々な取組みが展開されている。補助金などの外部支援に頼ろうとせず、自前の工夫でまちづくりを進めようとする動きが少なくない。その「内発型」といえる文化活動の中からいくつかの共通要素を取り出すことができる。それにより今後のわが国の人生90年時代でのライフスタイルや、成熟時代の半島文化のパラメータを見ることができるといって良い。

共通要素の第1は、面白いことしたいとの市民意識である。外部への発信で、新鮮な知的なインセンティブを持てるようになる。例えば「渥美半島の風」編集長は「東京に負けないぞ!」というのがインセンティブだとする。伊万里市のアンダーゴールド35の代表は「伊万里を世界へ」と発想する。有田町の有田まちづくり公社も「有田から世界へ」というフレーズで、外部世界へ発信することの「面白さ」を強調している。

第2は、半島文化を誇りとしようとの自負である。海と農の生活こそ、暮らしの根源との自信がそこには垣間見える。まつうら党交流公社本部長は「ほんまもんの生活体験を」と主張し「何もない、それを逆手に」とする。

第3は、外からの風（よそ者）は有効だとの視点である。よそ者の持つ目線や体験の広さは無視できない。渥美半島の「どろんこ村」を支えるのは名古屋から嫁いできた女性である。「渥美半島の風」の編集者は都会からのUターン者組である。松浦半島の有田まちづくり公社のメンバーは全員よそものである。伊万里市と伊万里焼を世界に発信しようと意気込むアンダーゴールド35のグループ代表は東京からのUターン者である。

半島文化の内発型展開を支える要素であり、半島の「文化」発信や「農的」発信を支えるキーワード

として、以上の3点を指摘することができよう。

この実態を踏まえながら、内発型展開を行う文化活動団体への地元大学の関与方法を考察する。一つはCOCとしての地元活動への大学の支援的な関与、もう一つは大学をハブとする各地文化活動の越境情報ネットワーク化の可能性を検討するものである。

## 8. その他実績

平成28年7月13日「東京都秋葉原で越境地域政策研究」セミナーをFJK主催で開催。講師に三遠南信地域連携研究センター戸田敏行教授。20名弱が参加した。

10月18日「半島文化を考える」ワークショップをFJK主催で渥美どろんこ村にて開催。どろんこ村や「渥美半島の風」社中の編集メンバーら地元住民30名ほどが参加した。

11月17日「半島文化の広域的発信と越境的な大学連携を考える」ワークショップを佐世保の長崎国際大学で開催。FJKと三遠南信地域連携研究センター共催。佐世保市役所やまつら党交流公社メンバー、地元窯元ら30名余が参加。

12月16日「半島文化の内発型展開と地域活性化」セミナーを、FJK主催で東京都千代田区秋葉原の区民館で開催。約20人が参加。

## 一般共同研究Ⅳ.

### 1. テーマ

三遠南信の「道と越境の歴史文化」に関する通時的研究と社会的還元の試み

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 和田明美（愛知大学）

共同研究者 犬飼隆（愛知県立大学）

北川和秀（群馬県立女子大学）

藤田佳久（愛知大学）

山田邦明（愛知大学）

渡辺和敏（愛知大学）

協力者 黒柳孝夫、近藤泰弘、竹尾利夫

### 3. 期間

2016年6月から2017年3月まで

### 4. 目的

三遠南信地域の「道と越境の歴史文化」の特質を探り、今後の地域政策に資するべく、古代より現代までの千数百年の当地域の文字資料に基づく通時の研究を行う。古代東海道・東山道出土資料や近代までの史・資料に基づいて通時的な実証的研究を進め、二道・中央構造線沿線の越境地域文化の特色を解明するとともに、東アジア文化圏を視野に入れた交流史を明らかにする。その成果を公開還元し歴史文化軸をベースとする地域活性化と政策化を試みる。

### 5. 実績概要

各研究者が、古代から現代までの研究分担・専門領域に従って三遠南信地域の「道と越境の歴史文化」に関する資料の整理・分析・考察を進めた。また、千数百年にわたる各時代の「道と越境の歴史文化」の考察に基づいてデータ化・原稿化を行った。2017年1月の「越境地域政策研究フォーラム」の分科会でその一部を公開・発表し、2017年3月には研究成果報告書『三遠南信の「道と越境の歴史文化」に関する通時の研究と社会的還元の試み』（和田明美編）を公にした。

### 6. 今後の展開

今年度の研究成果を踏まえて、2017年度には『道

と越境の歴史文化—三遠南信クロスボーダーと東西文化—(青簡舎)を刊行し、研究成果の公開と社会的還元を目指す。また逐次、各人が三遠南信の歴史文化や越境に関する講演・講座・セミナー活動を行い、歴史文化を基調とする企画に参画しながら、それらの実践を通して三遠南信地域における高次の地域活性化の一翼を担い、政策具体化を推進する。

## 7. 研究内容

三遠南信地域の文字文化の特質を探り、今後の地域政策に資するべく古代より現代に至る 1500 年ほどを対象とする三遠南信地域の通時的な歴史文化研究を行った。具体的には、古代から近代・現代に至る各時代担当の研究者が、古代律令制の時代よりの東海道・東山関連の出土文字資料や古代・中世から近代までの三遠南信地域に関する文献資料・歴史史料に基づいて、「道と越境」に関する実証的で通時的な研究を進めた。

研究分担については【古代:犬飼隆・北川和秀・竹尾利夫・和田明美】【中世:山田邦明】【近世:渡辺和敏】【近世・近代:藤田佳久】【日本語学:近藤泰弘】【古代～現代文化と政策化サポート:黒柳孝夫・竹尾利夫】である。なかでも古代から中世にかけての研究は、資・史料の豊富さもあって東海道を軸に「古代史料にみる三遠」北川和秀、「伊場遺跡(浜松)木簡の位置」犬飼隆、「古代東海道と参河国の二見の道」竹尾利夫、「古代東海道・三遠の渡り」和田明美、「中世三河・遠州国境地域の交流」山田邦明、「近世遠江の東海道と秋葉街道」渡辺和敏、「中央構造線と東西文化交流」藤田佳久等々に新たな研究の進展が見られた。

## 8. その他実績

◆ 万葉集東歌オープンセミナー～東歌の宝庫・古代ぐんま「万葉東歌を伝える」～、「東歌と写本・版本」北川和秀、「東歌の受容」和田明美、2016 年 8 月 28 日、群馬県立土屋文明記念文学館  
概要:連続講座「東歌の宝庫・古代ぐんま」の一貫としてのセミナーであり、東歌がどのように伝えられ受容されてきたのかを、写本・伝本・受容史をテーマに東歌(東国地方)の側から新たな視点で解明した。講師二人が報告・発表のち座談を行い、会場からの質問にも適宜対応した。

◆ 万葉特別講座、「古代日本語「しかすが」と三河国の「しかすがの渡り」—古代の「道」と「渡り」の越境文字文化—」和田明美、2016 年 10 月 17 日、名古屋市緑生涯学習センター

概要:古代三河国の豊川河口の「しかすがの渡り」にスポットを当てながら、三遠南信クロスボーダーの地域性に迫り、古代東海道の「道」と「渡り」が創出する文字文化の特質を明らかにした。

◆ 2016 年度「越境地域政策研究フォーラム」(2017 年 1 月 28 日)分科会 5「越境地域と歴史文化」  
・ 古代東海道・東山道の「坂・境」と越境-古代日本語からのアプローチ- : 和田明美(愛知大学)  
・ 古代史料にみる三遠:北川和秀(群馬県立女子大学)  
・ 参河・遠江国と古代東山道:竹尾利夫(名古屋女子大学)  
・ 明治期資料からみた三遠の河川舟運-歴史 GIS データベースの構築に向けて- : 飯塚隆藤(愛知大学)  
司会・進行:藤田佳久(愛知大学)  
コメンテーター:北川和秀(群馬県立女子大学)  
概要:道と越境をテーマに、歴史・地理・民俗・文学・語学の視点から越境地域を捉えなおすとともに、今後の地域政策の新たなビジョンを提示しつつディスカッションを通して深めた。

◆ 研究成果報告書『三遠南信地域の「道と越境の歴史文化」に関する通時の研究と社会的還元の試み』(和田明美編)

### 【論文】

- ・ 木簡に刻書する文化とそのひろがり:犬飼隆
- ・ 古代史料にみる三遠:北川和秀
- ・ 参河・遠江国と古代東海道—万葉集「引馬野」の所在と結び付けて—:竹尾利夫
- ・ 古代東海道と東西越境地域の「渡り」-「渡津」「しかすがの渡り」を中心に- : 和田明美
- ・ 三河・遠江国境地域の中世:山田邦明
- ・ 旅日記からみる江戸時代の関所破りの実態:渡辺和敏
- ・ 三遠南信地域における中央構造線文化軸-豊かであった山間地域- : 藤田佳久

### 【コラム】

- ・ 越境地域政策の確立に向けて:戸田敏行

- 「越える」の意味について：近藤泰弘
  - 三遠南信地域の歴史 GIS データベースの構築に向けて：飯塚隆藤
  - 「小盆地小宇宙」をめぐって：岩崎正弥
- 概要：東海道と中央構造線を切り口に、「道と越境」「三遠南信クロスボーダーと東西文化」を縦横に据えて、共同研究の成果の一部を報告書としてまとめたものである。古代編と中世・近世・近代編からなり、共同研究者・研究協力者9名と三遠南信地域連携研究センター長ほか3名、計11名が論文・コラムを執筆した。

## 一般共同研究Ⅴ.

### 1. テーマ

インフォーマルな交流を介した越境地域の産業経済連携に関する研究

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 佐藤遼（東京大学大学院）

共同研究者 小野悠（愛媛大学）

近藤早映（東京大学先端科学技術研究センター）

伊藤弘基（NPO 法人うつくしま NPO ネットワーク）

協力者 福田峻、梶谷彰男

### 3. 期間

2016年6月から2017年3月まで

### 4. 目的

本研究は、越境地域において企業間取引や新規事業開発などの産業経済連携を支援する際に、企業活動や地域活動などでのインフォーマルな交流を介した取引創出や創業の支援が重要となる、という仮説の検証を目的とする。

### 5. 実績概要

まず、企業間取引や創業に関するデータを分析し、越境地域における企業間取引と創業の特徴について分析した。次に、越境地域の自治体等へヒアリング調査を行い、次に挙げるインフォーマルな交流を介した産業経済連携の事例を収集した。

- 越境交通・越境合併などの企業活動を介して越境産業経済連携が促進した事例
- 観光交流・環境保護などの地域活動を介して越境産業経済連携が促進した事例

最後に、全国の定住自立圏形成自治体に対してアンケート調査を実施した。

### 6. 今後の展開

アンケート調査の結果を分析し、次に挙げる県外との交流を介した産業経済連携の事例についてアンケート調査を行い、越境地域での特徴について分析する計画である。

- ビジネスマッチングなどの取引創出イベント

- を介した県外との取引創出事例
- その他の交流機会（企業活動、地域活動など）を介した県外との取引創出事例
- 中心市街地などでの創業支援施策を介した県外からの移住者の創業支援事例

## 7. 研究内容

### 1) 統計データ分析

- 手法検討、データ作成、分析実施、ヒアリング対象の決定
  - 企業間取引データは（株）帝国データバンクが保有する企業間取引データの提供を受け分析する。
  - 創業データは総務省統計局が公開する経済センサスの地域別データ、創業支援事業計画における目標値等を分析する。
  - 越境地域とその他の地域の間でどのような違いが見られるか、およびインタビューやアンケートの対象とする地域においてどのような特徴が見られるかについて分析する。

### 2) ヒアリング調査

- 山陰の越境地域事例：鳥取県米子市と島根県松江市（複眼型の越境定住自立圏を形成）
- 瀬戸内の越境地域事例：愛媛県今治市（一市単独で定住自立圏を形成）と広島県尾道市
  - 統計データ分析を踏まえ、強い産業経済連携が見られる越境地域2事例を、中国地方周辺から選定。
  - 定住自立圏形成自治体の産業経済連携に関する事業主体に協力を依頼し、産業振興事業の運用実態について調査する。
  - 具体的には、市役所、商工会議所、商工会、都道府県や市町村の第三セクター、地方銀行・第二地方銀行、信用金庫・信用組合、大学、NPO等へのインタビューを実施。
  - 定住自立圏が越境している山陰地域と、していない瀬戸内地域を比較し、制度による影響が見られるかについても考察する。

### 3) アンケート調査

- 調査票設計、プレ調査、アンケート実施、回収、データ集計、データ分析
  - 全国の定住自立圏形成自治体の産業経済連携に関する事業主体に協力を依頼し、産業振興事業の運用実態について調査する。

- 具体的には、市役所、商工会議所、商工会、都道府県や市町村の第三セクター、地方銀行・第二地方銀行、信用金庫・信用組合、大学、NPO等を対象とし、アンケートを実施。
- インフォーマルな交流の実態がどのように異なるか、越境地域と他地域の差などを定量的に分析する。

## 8. その他実績

- 2016年度越境地域政策研究フォーラム「インフォーマルな交流を介した越境地域の産業経済連携に関する研究」（佐藤遼、2017年1月28日）
- 山陰地域の鳥取県米子市と島根県松江市、および瀬戸内地域の広島県尾道市と愛媛県今治市の間での県境を越えた産業経済連携の事例について、民間組織主導のインフォーマルな交流による影響に着目して報告した。



## 一般共同研究 VI.

### 1. テーマ

県境道路沿道ゾーンの地域構造に関する研究

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 小塚みすず（神戸市立工業高等専門学校）

共同研究者 川本義海（福井大学大学院）  
三寺潤（福井工業大学）  
吉村朋矩（福井工業大学）

協力者 酒井俊雄、高木直茂、今井洋平、橋本拓己、近藤幸次、宮本好昭、堂本博滋

### 3. 期間

2016 年 6 月から 2017 年 3 月まで

### 4. 目的

県境道路沿道を対象とし、データの整理および地域構造分析を行うことで、地域特性を表す指標と道路整備との関係を明らかにする。データ分析には、先行研究で用いていた行政区分単位から、地域標準単位（1km）への変更を試みる。

### 5. 実績概要

福井県を対象にデータの収集・整理を行った。また、GIS を用いてデータを可視化することにより、地域の状況について主に、人口、施設、交通等の視点から考察を行った。

また、現在、交通不能区間となっている県境道路（国道 417 号）や町の観光拠点や活動拠点となる地域施設に現地調査を行うとともに、関係機関へのヒアリング調査などを通して、県境道路整備を踏まえた地域政策の展開について確認した。

さらに、隔月で NPO 法人 福井地域環境研究会 県境分科会を開催し、県境道路政策に関する資料や情報の共有化を図った。

### 6. 今後の展開

今年度は研究対象地域が限定的になったことから、対象範囲の広域化を検討したい。

収集したデータについては、データベースとなるものはできたものの、道路ネットワーク等を作りこむ必要があるほか、総合的な分析・評価を行う必要

がある。

来年度も NPO 法人 福井地域環境研究会 県境分科会等と協力し、県境施策についての理解を深めるとともに、8 月頃に県境道路の現地調査や関係者へのヒアリング調査を実施する（候補地は決定し、現在、先方と調整中）。

### 7. 研究内容

県境道路を有する福井県池田町を対象に、基礎的データを整理するとともに、現地調査および行政ヒアリング調査に基づき、県境地域における行政課題や道路整備を踏まえた県境地域戦略の検討を行った。

#### 1. 対象地域の基礎的データの整理

自然条件・地勢、人口動態、道路網などの基礎的データの収集を行い、これらの関係について GIS を用いて可視化した。その結果、池田町民は国道 476 号と県道 117 号が交差するエリアに多く居住しているほか、道路沿道に密に居住地していることを確認した。また、人口中心から南東方向に向かって粗密になっている。国道 417 号、476 号、および、県道 175 号は隣接する自治体と道路でつながっていないため、特にその傾向が顕著である。つまり、道路に沿ってコンパクトに市街地が形成されているほか、道路の先がどこにつながっているか、もしくは途切れているか否かで人口が増減する状態を確認した。

#### 2. 現地調査・ヒアリング調査・アンケート調査

県境地域における県境道路整備の課題や道路整備を踏まえた県境地域戦略について把握するため、現地調査、行政ヒアリング調査、アンケート調査を行った。これらの調査の実施にあたっては、国土交通省近畿地方整備局および池田町役場産業振興課にご協力いただいた。

現地調査では、県境道路の整備の状況や池田町の新たな地域資源（施設）を確認し、今後の活用について考察した。

ヒアリング調査では、(1) 積雪時における他の行政機関との連携、(2) 災害時の情報ネットワーク、(3) 緊急搬送時の連携に関する現状、(4) 福井県外との連携、(5) 池田町における今後の道路計画、(6) 冠山峠道路整備に関する県・国との体制づくりの、6 項目に情報を整理し、まとめた。

アンケート調査では、道路整備の期待度を明ら

かにするために、回答データを AHP により分析し、「道の駅など新たな施設の整備やサービスの提供」、「交流圏の拡大で地域の認知度の向上等による地域イメージの向上」、「日常生活圏や通勤圏の拡大等による定住人口の維持・促進」などに期待が寄せられていることを明らかにした。

3. NPO 法人福井地域環境研究会県境分科会を各月で開催し、県境政策に関する知識の積み上げや各種情報の共有を図った。
- 今年度、GIS による分析が十分できたとは言いがたい。引き続き来年度も継続して調査・研究を進める。

## 8. その他実績

### 【研究会】

- 1) NPO 法人福井地域環境研究会県境分科会

(開催日)平成 28 年 5 月 24 日(火)

平成 28 年 7 月 12 日(火)

平成 28 年 8 月 29 日(月)

平成 28 年 11 月 12 日(火)

平成 28 年 12 月 16 日(金)

平成 29 年 2 月 23 日(金)

### 【学会発表】

- 2) 交通科学学会平成 28 年度学術研究発表会講演論文集, pp. 31~32, ヒアリング調査に基づく県境地域の期待と課題—福井県池田町の事例—, 細江雅希, 吉村朋矩, 川本義海, 三寺潤, 小塚みすず, 2016. 12. 9

(概要) 県境道路を有する福井県池田町を対象として、現地調査および池田町行政担当者へのヒアリング調査を実施し、県境道路の特性を詳細に把握することにより、県境道路沿道地域の課題と道路整備の方向性について明らかにするための基礎的な知見を得た。

### 【論文】

- 3) 都市計画報告集, Vol. 16, No. 4, 条件不利地域における県境道路整備の期待効果—福井県池田町をケーススタディとして—, 小塚みすず, 三寺潤, 吉村朋矩, 川本義海, 2017. 3(予定)

(概要) 県境地域における地域政策は、国・県・市町村という階層構造や広域ブロックなどの圏域を基本としつつも、行政の境界を越え

た施策の展開や、柔軟性をもった取り組みの必要性がある。本報は県境道路を有する福井県池田町を対象に、人口動態や道路網等の基礎的データを整理するとともに、現地調査、行政ヒアリング調査、アンケート調査の結果を報告する。

### 【フォーラム・シンポジウム】

- 4) 越境地域政策研究フォーラム, 県境道路沿道ゾーンの地域構造に関する研究, 小塚みすず, 2017. 1. 28

(概要) 文部科学省共同利用・共同研究拠点「越境地域政策研究拠点」として愛知大学三遠南信地域連携研究センターが実施した、2016 年度越境地域政策研究フォーラムで、発表・講演およびディスカッションを行った。本年度の調査研究の成果の一部を報告した。

- 5) NPOREF 第 4 期(通算第 37 期)中間活動報告会, 人口減少, 高齢化, 国際化(観光)時代における県境道路の在り方, 西谷光史, 小塚みすず, 三寺潤, 吉村朋矩, 川本義海, 他, 2017. 2. 10

(概要) 県境道路を有する福井県池田町を対象として、現地調査及び池田町行政担当者へのヒアリング調査を実施した結果を報告した。そのほか、本分科会の活動報告、輪読文献から得られた情報整理、今後の予定について報告した。

### 【その他報告】

- 6) NPO REF, Vol. 3, pp. 59~63, 人口減少, 高齢化, 国際化(観光)時代における県境道路のあり方, 橋本拓己, 小塚みすず, 三寺潤, 吉村朋矩, 川本義海, 他, 2016. 7

## 一般共同研究Ⅶ.

### 1. テーマ

越境地域のリスク管理

### 2. 代表者・共同研究者・協力者（および組織）

代表研究者 大木聖子（慶應義塾大学）

共同研究者 金森貴洋、横山魁、永松冬青、久嶋悠輝、岡島拓哉

協力者 蔣湧、温家洪

### 3. 期間

2016年6月から2017年3月まで

### 4. 目的

三遠南信地域が面する遠州湾は南海トラフ巨大地震の震源域であり、巨大災害になることが見込まれている。本研究は静岡県を対象に社会の脆弱性を俯瞰的に評価し、地域防災能力を検証して事前復興対策を検討する。

### 5. 実績概要

東日本大震災では、絶望的な状況下においても防災教育の成果が発揮されたという報告がなされている。しかし関東以西では東日本大震災以降も従前通りの防災教育が行われている学校が数多く存在しており、来るべき南海トラフの巨大地震への潜在的なリスクとなっている。そこで、静岡大学教育学部において防災教育の教材作成を行っている藤井基貴准教授を中心とした教材作成者とともに、新たな防災教育教材を開発する試みを行った。

### 6. 今後の展開

東日本大震災後、防災教育を初めとしたソフトの防災対策が強く押し出されるようになったことにより、教育教材などが集積されつつある。その一方で、それらの教材による教育効果が震災後にしか確認できないことから、現場教員には徒労感が募ることも見えてきた。本研究ではその効果測定を可能にした。得られた成果は次年度以降、三遠およびその周辺の自治体、またひろく南海トラフの被害想定域にある学校において実施する予定である。

### 7. 研究内容

東日本大震災では甚大な被害が出た一方で、絶望的な状況下においても防災教育の成果が発揮されたという報告もなされている。金石をはじめとした三陸地域の多くの学校が人的被害を最小限に抑えられたことは、多くの報道に取り上げられたとおりである。しかし、いわば防災教育の先進地域であった三陸に比較して、関東以西では東日本大震災以降も従前通りの防災教育が行われている学校が数多く存在しており、来るべき南海トラフの巨大地震への潜在的なリスクとなっている。

永松・大木（2015）による宮城県の学校教員を対象としたアンケート調査によると、学校現場において防災教育の障壁となっているものとして、「やり方がわからない・ワークシートがない・時間数が足りない・地域の特徴がわからない・授業準備が大変」といった現状が指摘されている。そこで、静岡大学教育学部において防災教育の教材作成を行っている藤井基貴准教授を中心とした教材作成者とともに、地域の地震リスクを盛り込んだ、新たな防災教育教材を開発する試みを行った。

まず、三遠地域外での実施事例の中から成果が見られているもの、顕著な成果は見られないもの、負の効果もたらされたものについて報告を行い、その要因を明らかにした。災害科学に関する研究においては、「成果が見られる」というのは実際には震災後にしか名言できない。しかしこれでは低頻度巨大地震の防災施策は後手に回る。そこで、実践共同体論を理論のフレームワークとして、申請者らと共同の実践を行った人びとの行動変容を測定した。本来、実践共同体論とは実践共同体の変容を追うものだが、本研究ではこれを発展させ、実践共同体の参加者の変容を追えるように理論を整理した。これにより、防災教育の効果測定が可能となったことが大きな成果である。

### 8. その他実績

- 永松冬青・大木聖子・広田すみれ、『地震動予測地図を用いたリスクコミュニケーション研究』、日本災害情報学会第18回、2016年10月、「南海トラフ巨大地震の今後30年の発生確率は70%」といった不確実性のある科学情報について、一般市民がどのような認知をしているのかを大規模社会調査により明らかにした。
- 飯沼貴朗・山崎理沙・田上瞬・大木聖子、『家庭

への展開をめざした学校防災教育の実践と考察  
～長野市立真島小学校を事例として～』, 日本災害情報学会第 18 回, 2016 年 10 月, 実践共同体論を実践共同体に参加する人びとの行動変容を捉える枠組みに考察し直したことで, 防災教育の効果測定を可能にした。

- 齋藤文・大木聖子, 『避難所運営を疑似体験する演習型教材「4 コマ漫画教材」』, 日本災害情報学会第 18 回, 2016 年 10 月, 災害発生時のような切迫した状況下における不確実な情報を元にした集団合意形成を事前にトレーニングする教材を開発し, その実践例を報告した。学会賞受賞。